看護実践・キャリア支援センター通信

2021年
4月

Vol.21

地域貢献事業
がん看護研修「明日から使える症状マネジメント」

12月12日に本学附属病院がん専門看護師　中村由美師長と梅岡京子主任を講師に迎えて研修を行い、院内12名、院外7名、合計19名の参加がありました。

最初にがん疼痛を軸にした症状マネジメントのについて講義がありました。疼痛は部位により様々な症状を呈し、そこから導き出されるケアに看護師のアセスメント力が必要です。後半は実際の事例を題材に、グループでディスカッションを行い、症状マネジメントに対する理解を深めました。講師からの助言に加え、新たな学び・考え方を共有することができ、有意義な時間となりました。

中村　由美師長　　梅岡　京子主任

この痛みには何が起こっているのだろう

この学びをがん療養中の患者を支える実践に活かしてほしいと思います。

地域貢献事業
看護研究研修「看護研究のキホン」

佐竹　陽子先生

1月23日に本学 医学部看護学科 成人急性期看護学 講師　佐竹陽子先生を講師に迎え研修を行い、院内12名、院外3名、合計15名の参加がありました。

参加者はこれから看護研究を始めようという人が多く、講義は臨床の疑問を通して看護研究の「種」を見つけるところから始まり、どこに注目するのか、気付いたところをどう深めて研究課題にしていくのかについて、具体的なお話がありました。

その後、考えている研究テーマや手法等をグループワークで話し合い、その内容について先生からコメントをいただくという、双方向のディスカッションがありました。

この研修終了後、院内の複数の受講者から当センターに研究の進め方の問い合わせや共同研究の相談等がありました。これを契機に、今後ますます臨床現場から生まれる看護研究が進んでいくことを期待します。

臨床での疑問が研究の「種」

看護基礎教育
実習指導者の教育能力育成プログラム

2 月 17 日（水）に、上級臨床指導者・臨床指導者合同研修を開催しました。この研修は、今年度、上級臨床指導者育成プログラムが実施できなかったことから、これまでの同プログラムの修了者が自らの教育実践を語る場を設けることで臨床指導者が自らの役割を理解し、上級臨床指導者と臨床指導者の協働を進めるという目的で行われたものです。

部署での実践を報告

18 名の上級臨床指導者が発表し、41 名の方が聴講しましたが、新型コロナウィルス対応のため、3 部構成にし、1 部あたりの人数を少なくするように工夫しました。

発表には、アンケートを取って課題を把握したり、グループ活動のリーダーをベテラン看護師に頼んだり、他部署との共同研修を企画したりと、様々な取り組みが紹介される一方、コロナ禍で学生・新人看護師に加え、2 年目看護師への教育が行き届いていないことへの苦悩なども語られました。

発表後のグループワークでは、学生指導やスタッフ教育を担当する者として「若い人、中堅など、違う世代への接し方の悩み」等、共通の課題を、発表者を交えて話し合いました。

講評いただいた看護学科長石澤教授や実習ワーキンググループ長の五十嵐教授からは、臨床に寄り添った実践への評価とともに、大学がコロナ禍でどう対応しているかや看護学生の実習など例年受けている教育レベルの違いなどを伝達いただきました。この内容は、今後のスタッフ教育に活かされるでしょう。

アンケートには、「指導者としての役割を考える機会になった」「個人（指導される側）のスモールステップを大切にしたい」等、普段交流する機会が少ない臨床実習指導者間でのディスカッションに刺激を受けた内容が多く見られました。

話し合うことでモチベーション UP にも

講評いただいた先生

石澤看護学科長兼副センター長

五十嵐教授

実践報告を高く評価していただくとともに、大学ではリモート授業が増え、実習が減っていることを新人看護師の教育の際には考慮する必要があること等も教えていただきました。

特定行為研修成果発表会

2 月 22 日（月）、今年度の特定行為研修の研修生による成果発表会が行われました。

午前は急性期コースの発表があり、急性期医療の中で起こるケースの難しさと向き合った発表が、午後の慢性期・在宅コースでは患者の機能維持に対する考察についての発表が多くありました。

今年は新型コロナウィルスの影響もあり短時間での発表会となりましたが、研修生から、一年間の研修での学びや、今後の活動に向けての熱い思いが伝わり、これからの活躍が大いに期待できる発表会でした。

吉川病院長

病院長からの挨拶では、特定行為研修研修生に対する臨床現場での今後の活躍への期待が語られました。

実習先の部署を始め、多くの方に
研修から得た学びを聞いていただきました

看護学科学生へのキャリアデザインプログラム
Teams によるリモート交流会

3 月 3 日（水）、本学の看護学科 3 年生対象に、若手看護師との交流会を行いました。例年は、希望する部署の見学や若手看護師との直接対話を行っていましたが、新型コロナウィルスの感染予防対策として今年度は Teams を用いたリモートでの開催となりました。

リモートでの交流会は初めての試みでしたが、59 名の参加がありました。学生は希望する 2 つの部署の看護師と 45 分程度の交流を行い、部署の雰囲気や休暇・夜勤などの勤務体制、初任給を何に使ったか等、気になる点について聞いていました。看護師も、親しみやすい雰囲気で、質問に答えたり、温かいメッセージを送ったりしていました。部署によっては写真やパワーポイントを用意する等、附属病院の魅力を伝えようと工夫して臨んでくれました。

部署ごとのブースから
職場の魅力を伝える

初めての試みのため、一部音声に不具合が出る場面もありましたが、気になる職場の看護師の話を直接聞けたことに、「職場のイメージができた」と評価は概ね高く出ていました。リモートにすることで参加へのハードルが下がり、多くの参加に結び付いたと考えられます。

来年度も直接交流と併せて実施し、本学附属病院への就職を支援していきたいと考えています。

特定行為研修　閉講式

閉講式参加の修了生と研修でお世話になった方々

３月 18 日（木）、看護師特定行為研修の閉講式が行われました。
今年度は急性期コース第５期生５名、慢性期・在宅コース第３期生９名が研修を修了し、修了証書が授与されました。
今年度は新型コロナウィルス感染防止対策のため、開講式が中止となる等順調ではない滑り出しでしたが、リモート演習などの新たな取り組みと、修了生の熱意、実習協力病院や院内各部署の多大なるご協力で、全員修了することができました。
ご指導いただいた先生方、各部署の皆様に、御礼申し上げます。

【急性期コース修了生より】

今年度はコロナ禍で医療体制がひっ迫する中、特定行為研修を継続していただき、無事に修了を迎えることができました。この特定行為研修で、看護の視点、医学的視点で患者や家族を捉え、倫理的視点を踏まえた特定行為の実践の必要性の判断について学ぶことができました。また、特定看護師は看護師のロールモデルの役割があり、普段から看護へ取り組む姿勢が評価されるといわれます。実習中、特定看護師の方が、看護実践を通してよりよい医療や看護について指導・育成している姿を見て、特定看護師の実践を肌で感じることができました。今後も、この奈良県立医科大学附属病院で学んだ知識や技術を活かして特定行為を実践できる看護師として取り組んでいきます。

（急性期コース５期生　石本　真治）

【慢性期・在宅コース修了生より】

特定行為研修を受ける前は技術を学んで実施すると思っていました。
しかし、技術だけをする看護師ではなく、研修の中で倫理や特定行為看護師が担う役割について実践することが大切だと考えるようになりました。
研修中に病棟で倫理面を考慮したデスカンファレンスを実施する機会がありました。病棟で、終末期に対する患者や家族への関わりついて、ガイドラインやスケールなどを用いて考えことができました。その後、後輩看護師が他の患者で、倫理的側面を考える記録ができており、自己の学びが病棟の看護の質の向上に繋がっていると実感できました。
これから特定行為看護師として活動していく中で看護師としての視点や医師としての視点に加えて倫理観も調整できるような看護師として活動していきたいです。

（慢性期・在宅コース３期生　沖村　裕和）

今後のセンター事業

☆【地域貢献事業】自分のこころがラクになる 研修 ［Web 研修］
日時:6 月 19 日（土） 13:30～15:30
☆【地域貢献事業】ストーマケア研修
日時:7 月 10 日（土） 9:30～15:30（予定）
☆【地域貢献事業】妖怪人間ベムは永遠に笑わない－生きる意味 それは誰かとの間（あわい）－
日時:7 月 17 日（土） 13:00～16:00（予定）

発行元：公立大学法人奈県立医科大学　看護実践・キャリア支援センター（℡0744-22-3051 内線 2184）